

スペシャルにしてユニーク

(創世記一・二六〜二八、二・七)

ティーンエイジャーのカリスマにしてファッションリーダーの西野カナさんのヒットナンバー、「トリセツ」に違和感を禁じ得ない(歌詞裏面参照)。とはいえ四十八歳のオジサンを感じる違和感はネット上に溢れかえる男性(特に未婚)からの違和感、すなわち「へでもそんなときは懲りずにとことん付き合っただけでしょう、なんて絶対無理じゃないですか!ガンジーじゃなし(オードリー・若林)」といったものは違う。それは人を「モノ」として表現する歌詞の世界観だ。もともと西野さんもその辺のところは気づいていて「へもしも少し古くなって、」というくだりでは初めて出会ったことを思い出して一気に「人間」になってみたりするのだが、近代の洗礼を受けたオジサンはこうしたメタファーの混合にはついていけないのだ。閑話休題。「人間とは何か」という問いはキリスト信仰を考える上で必須のものであるばかりでなく、その人の生の質に直結するものである。今日は聖書から人間とはどのような存在であるかについて考えたい。

一、スペシャル

二六節には神による人間の創造の様子が描かれているのだが、ここで大切なことは人間は「神のかたち」に「神に似せて」創られていると記述されていることである。この「神のかたち」に似せられた創造という記述はほかの被造物には見られないものである。つまり人間は他の被造物とは区別されているということである。続いて神のかたちに作られた人間には他の被造物を支配する命令が与えられる(二八節)。この箇所は特にエコロジストたちによつて槍玉に挙げられ、彼らはこのキリスト教の教えこそが環境破壊を生んだと主張するがそれは曲解である。ここで言っていることは神のかたちに作られた人間は、神のみこころに沿つて地を管理することを任されているということなのだ。更に二章の記事を読めば人間だけが神の息(「心」、「霊」なども訳される)を吹き入れられて創造されたことが書かれている。こういうことを総合すると聖書は被造世界の中での人間の特殊性を強く支持しているといえる。神と人間の間に越えられない線があるように、聖書は人間と他の被造物との間にそれを混同してはいけない一線が引かれていることを強く示唆しているのだ。

二、ユニーク

カタカナで「ユニーク」と言えば「面白い」といった意味で用いられている文脈が多いが、本来英語にはそういった意味はない。むしろユニークの語源となったラテン語が「一」を表す「UNUS」であるように、「唯一の」「独特の」といった意味を持つ言葉である。つまりこの世界に生きるすべての人間はみな神のかたちに作られた唯一無比の存在なのである。神が唯一のお方であるように、神に創られた人間はそれぞれが唯一の存在として神と人とに覚えられるべきなのである。だがこれは人間が孤独であることを意味しない。なぜなら聖書の神は「人が一人であるのは良くない」と語り、助け手としてエバを創造されたからである。更にそれぞれに固有性を持つ人間同士の関係は支配とは無縁のものであった。アダムの助け手としてエバが作られたとき、そこにあったのは相互協力であり一致であった。しかしこの関係は彼らが神の前に罪を犯したることによつて崩れた。その結果人間の世界の中に支配と被支配の原理が入り込んだのである。(創三・一六)。そう考えると覇を競い、しのぎを削つて、勝負に明け暮れる現在の人間社会の姿はあるべき人間の姿ではないということがわかる。人間とは本来それぞれが固有で尊重されるべきものなのだ。

* * *

しかるに現代社会を見てみると、いたるところに画一性と非人格化が満ち溢れている。たいていの場合人間はその有用性で測られ、「使える」「使えない」という振るいにかけられて選抜される。そうしたことの極みにあるのが「人材」とか「人的(社会)資源」いうことばだ。もちろん学術語としてそういう言葉はあるのだろうし、必要なかもしれない。しかし教会には絶対になじまない。なぜなら神は人間をご自身とコミュニケーションのできるご自身のかたちをもつ人間として作ったのであって、都合のよい「素材」としたのではないからだ。もともと最近ではそうした「材料性」「モノ化」が鼻につくということ、企業でも人を財産のごとくに大切にするという意味を込め、「人財」の字を当てる会社もあるというが、これまた教会にはそぐわない。「経済」のにおいが取り切れないからだ。もう一度言おう。聖書の人間観は明白に一人一人の人間はスペシャルであり、ユニークであると教えている。そしてこの言葉を担保するのは創造主なる神である。冒頭の西野カナさんの歌のさびに「永久保証の私」とあるが、ひとつ彼女に聞いてみたい。「あなたに永久保証をつけたのは誰か?」と。